

「 静中動・動中静在り動中動」

武道において、敵に相對するとき「先の先」、或は「後の先」をとって勝つ。

殊に、居合においては仮想敵に相對するので相手の動静を把握することが難しく、敵の動きを想定がせず形を行っても自己満足のパフォーマンスでしかない。

帯刀して坐し、抜刀すべく準備が整い、そこで静止の状態になると、動（抜き付け）への変化には数分の一秒の＜遅れ＞が生じ、「先」をとることが出来ない。

即ち、静止から動への瞬時の変化はよほどの訓練をしても難しい。

言い換えれば、静であっても、動の状態でなければ素早い動への変化に対応できない。ここでいう「静」は、「止る」ことではなく、心が澄みきってしずまることを指す。

ヤクルト球団の補手・監督であった古田敦也氏に依れば、投手が投げる 150~160 キロの速球を「静止」の状態からは捕球することは困難だ、と断言している。

まして、ナックルボール等どう変化するか、何処に落ちるか判らない。その変化球を捕るには心も身体も「動の状態」にして置かねばならないのである。

居合も亦、相手の打突に瞬時に対応出来る「動の態勢」にして置かねばならない。

と言って心が揺れ動いたり、身体が動いたりしてはいけないことは当然の理である。心身が揺れ動けば敵に悟られ、業の起こりを抑えられるか、そこを見透かされ負けることは歴然としている。

そこに、「位や貫禄」、更に「氣」の充満があつてはじめて「動中静」・「動中動」の境遇を得ることが出来る。

その境地に至るため、稽古をして自己を練磨することである。

因みに書における運筆や筆圧、払い、留、などは居合に通ずるところがある。

筆の運び方は、居合の演武における業前であると考えてよい。筆鋒は居合では刀であり、筆心は筆の中心、刀の物打ちに相当する。

書道の基本点画を例にとって見る。

何事によらず基本が大切である。基本を忠実に教え通りにやることが上達の近道だ。

そこで、書道の基本点画を例に居合を考えて見る。

例えば、「丁」の字。横画の「一」は 45 度で入り、45 度で止まる。そして筆先を 45 度左斜め上へ返す。これを、「複勢」とう。居合で言えば抜き付である。

次に、横画を縦にしたものが縦画である。文字でいうと「下」の「|」のところである。

この時の送筆は力を緩めないことである。これを書道では、「努」というのである。

所謂、居合の切り下し（真向）である。

縦画に「懸針^{けんしん}」というのもある。文字では、「中」の「丨」がそれで、打ち込んで抜く間際まで、力を充実させ最後に抜き放す。居合運剣に相通じるものがある。

それから、縦画の「懸針^{けんしん}」を斜め抜きにした斜画の「新月」は、「服」という字の書き出しの部分。そして、斜画の「掠^{りよう}」は、「金」の字の斜め左下へ払った部分で、留意点は、鋭く速く払わねばならない。「好」の文字は「掠」を逆さにしたもので左下から右斜め上に撥ね上げたもので、二つ合わさると、刃筋をこそ違え居合でいう逆袈裟と袈裟切である。

続いて、「縦波」の「吏」という字の最後の右下への払いは、45度でゆっくり打ち込み、速く右下絵筆を運び、勢いよいよ45度で下へ払う。まさに、居合の血揮いである。

ひとつの文字は、居合のひとつの形に相当し、ひとつの文章は、居合の入場から、礼法・演武・そして退場までのようなものである。

居合のひとつの形にも、書道の一文字の中にも、「動中動有り」・「静中動有り」である。まして五本を演武するに於いてもや。

ここで、『書道入門全書』・<鈴木香雨書>から書道上達十訓を引用させてもらおう。居合道の稽古にも充分通用するので置き換えてみるとよいと思う。

書道上達十訓

- 1・一日に十枚書くより、毎日一枚ずつ十枚の方が早く上達する。
- 2・一度書いたら、手本と比較して悪いところを自分で直して見るとよい。
- 3・スラスラと書いても、止めるところはキチンと止めること。
- 4・誠意を込めて、念を入れて——絶えない努力があなたの字を上手にする。
- 5・漫然と習うより観察を鋭くせよ。原字を思い出しながら習えば、形は崩れない。
- 6・読みやすく美しい文字は、文章を更に引き立たせる。
- 7・真・善・美はこんな身辺から生じる。
- 8・人と人の和は文字の美から。心正しければ筆正しい。
- 9・技巧的のみでなく、心から出た美しさであってほしい。
- 10・天地もうごかすばかり言の葉の、誠の道をきわめよ。文章は心の声、書は心の鏡。

了